

# HITA

# PRIDE

# PROJECT

## 日田 #03

日田は「ヒト」でできている。

[HITA/HITO] HITA PRIDE PROJECT



日田を愛し、  
日田に生きるヒトたちの  
ストーリー。

## 日田

HITA  
PRIDE  
PROJECT

## #03

# 日田 HATA PRIDE PROJECT

日田を愛し、  
日田に生きる人たちの  
ストーリー。

高いビルはないけれど、豊かな緑がある。

夜の明かりは少なくても、夜空に数多の星がある。

人は多くないけれど、

さりげなく声を交わせる人がいる。

何気ない日常の中で、熱をもって、

日田に生きる人たちがいる。

今日も日田には、豊かさを纏ったストーリーが、

風のように流れている。

そして日田は、日田を愛する人たちで  
つながっている。



『大切なのは  
活きた経験』

KOJI KAJIWARA

1965年生まれ。日田林工高卒。大阪府の会社で金属加工に従事後、日田市へ戻り、技術者として愛知県と行き来しながら自動車部品用の機械製造などを手掛けてきたが、31歳で実家の農家を継ぎ、トマトの水耕栽培も開始。1998年に「観光農園トマトファーム」を開き、農業を控えた栽培や加工にも力を入れる。



「日々は選択と決断の連続です。その積み重ねがやがて一年経って、十年経って、きつと知らないうちに皆さん一人ひとりの大きな財産になっていきます。間違いかどうかなんて未来の自分が決めること。だから皆さんがどう行動し、何を体験するかが一生を決めるのだと思います」。自家製トマトジュースを片手に自身の過去の経験を思い返す。そして今の自分は確かに、「活きた経験」が作ったものだと言胸を張って言い切った。これからの日田を担う若者へ向けたメッセージだ。

「高校卒業後、大阪に移り、モノづくりへの関心からエンジニアとしての道を選んだ。日田へUターンした後も、会社員として自動車パーツの製造に従事した。31歳で家業のブドウ園を継ぎエンジニアから農家へ。フルーツトマトの味に感動し、トマト農家への転身を決意したのはそれから1年後のことだった。「当時、トマトを育てるには自分の体力と農薬に頼るのが一般的でした。時代の『あたりまえ』の前に、果たして美味しいトマトが作れるのかと最初は悩みました」。

それを解決したのが、エンジニア時代に経験した機械管理の考え方だった。「ハイポニカ水耕栽培」という水や養分を機械によって供給する栽培システムに挑戦し、ほぼ無農薬のトマト栽培が実現。寒暖が激しい日田の気候を生かして育てるフルーツトマトは糖度が高いと評判になり、今では遠方からの来場者も多い。「機械技術者から農家。大きな転機のようにだけど、やっていることは似ているから面白い」と笑う。

目標がある。農業従事者が減っていく、企業や大規模農家の参入でますます個人の経営努力が必要になっていく中で、いかに新しく持続可能な農業を日田から完成させていくか。そのために新しいことに挑戦をする姿勢は、日田で働くプライドがあつてこそ。この農園を日田に選んだ理由は、自分が生まれ育った場所だからだけではない。人の距離が近く、自然と人脈が広まる風土だったから。周りの人々に助けられた経験もたくさんあつたと語る。日田だったからこそ、新しいチャレンジが実を結んだのかもしれない。

どう行動し、何を体験するか。その蓄積こそが、未来への希望を作って自信になり、背中を押してくれるもの。「情報に溢れた時代だからこそ迷ってしまいます。でも行動を起こさないと実感できないものの方が多い。まずは外へ出て、たくさん活きた経験をしてみては」



DAISUKE TAJIMA

1988年生まれ。小学4年まで中津江村で過ごし、その後、福岡市へ転居。東京都の大学を経て精密機械メーカーに勤務したが、2016年4月に帰郷。現在は家業の「田島山業」で、製材業者などに対する営業や、現場の生産管理などを担う。

## 仕事で感じる 誇りと責任



### 林業会社員 日田市中津江村 田島 大輔 〈29〉

代々受け継がれてきた家業を、森を守っていききたい。そんな思いから帰郷を決めました。曾祖父、祖父、父が植え、育ててきた木を切り、また植え、育てて次の代へつなぐ。収益も大事ですが、森を守り育てることは地球環境を守ること。そんな仕事に大きなやりがいと誇り、責任を感じています。会社では、工務店や製材所と一緒に、家を建てる人を直接、森に連れてきて大黒柱を選んでもらう催しなども行っています。家への愛着が深まり、日田産の木のPRにもつながるからです。これまで東京などで多くの仲間や先輩に出会い、いろんな働き方、生き方があるということを学びました。だから若い人にも多くの人と接し、話して、自分の生き方というものを見つけてほしいと思います。

KAZUKI AYAGAKI

1948年生まれ。中学在学中に父が病気で入院したため、母や3人の妹を支えようと卒業後は家業の林業に従事。25歳でやまめ養殖・料理専門店「やまめの郷」を開き、約10年後に前津江町大野の現在地に移転した。代表として従業員を束ねる。

## 人との出会いを大切に



### やまめ養殖業 日田市前津江町 綾垣 一喜 〈70〉

やまめの稚魚や成魚の生産販売、甘露煮やうるかななどの加工品製造販売のほか、民宿や釣り堀も営んでいます。小さいころから釣りが好きで、その中でも天然のやまめの美しさは格別でした。林業をして働きながら県の水産試験場で養殖の技術を学び、「やまめの郷」を「から作り上げました。体一つで挑んだ私を世話して協力してくれた人がいて、事業ができた。人と人との出会いを大切にせねばと思います。毎年子どもを招いたつかみ捕り、釣り大会や河川への稚魚放流もやっています。あまり自然と触れ合う機会のない子どもが喜んでくれるとうれしいですね。中高生の皆さんには、自主的な努力を大切に、学校に行っている間は大変でも一生懸命勉強してほしい。社会に出ていろいろな役回りをする上で、きつとためになるはずですよ。

KENTARO KAWAZU

1981年生まれ。日田高卒業後、神奈川県のある大学に進学。高校・大学時代はラグビー部に所属し、就職した東京の農業機械メーカーで7年間、社会人ラグビーを経験。28歳で大手ゼネコンに移り、土木工事を学んだ後、2014年に帰郷。家業の「河津建設」に入社し現在、施工管理や営業のほか、広報の役割も担う。

## 大きい、仕事の達成感



### 建設会社員 日田市三芳小淵町 河津 賢太郎 〈36〉

高校、大学とラグビーをやっていました。長男として実家の建設業を継ぐつもりはありましたが、親に「もう少し自分のやりたいことをやらせてほしい」と無理を言っていて、社会人でも28歳までラグビーに打ち込んでいました。今もラグビーを通して出来た仲間は宝ですね。会社では現在、営業として顧客との打ち合わせや、建設現場の施工管理などを行っています。建設業は道路や橋などの社会基盤整備、病院や学校、企業の建物など「みんなに必要なもの、役に立つもの」をつくる仕事。ですから、やり遂げたときの達成感は大きいものです。会社は創業70年近いですが、まちのあちこちには先輩たちが手掛けた仕事、苦勞の跡が残ります。見るたびに誇らしい気持ちにもなります。Uターンの人も多く働いていますので、若い人たちにはぜひ日田を好きになって、日田のまちをつくる建設業で働いてほしいですね。

HIROSHI NAKANISHI

1965年、広島県生まれ。幼少のころ、母の実家がある福岡県うきは市に移る。藤蔭高卒。福岡県内の大学を中退した後、日田市内の現像所などを経て、知人の紹介で2003年「地元新聞社」に入社。現在、取締役部長として管理業務の傍ら、取材や撮影、広告営業もこなす。

## 紙面で交流のお手伝い



### タウン情報紙役員 日田市玉川三丁目 中西 浩 〈52〉

「地元新聞」はタウン情報紙。広告主の売り上げアップにつながるということが大事ですが、そのためには面白い記事を書いて、多くの人に読んでもらわなければなりません。だから読者から記事について感想がたくさん寄せられると、うれしくてもっと頑張ろうという気持ちになります。日田は福岡市などの都市部にも近い一方で自然に囲まれたいいところ。もっと人口が増えればいいですが、今の時代、あまり期待はできません。だから周辺地域、特にうきは市や朝倉市などと交流がもつと広がってほしいと思います。遊びだけでなく、ビジネスでももっとも交流が活発になれば、きつと新たに生まれるものがあるでしょう。「日田市版」とともに「朝倉・うきは・田主丸版」も発行する私たちも、紙面でそんな交流のお手伝いのできればと願っています。



HATA  
PRIDE  
PROJECT

何も手を加えない、  
という豊かさがある。

YASUHIKO MITOMA

1957年生まれ。日田林工高を卒業後、自衛隊に入隊。福岡県や北海道などで6年間勤務し、結婚を機にUターンした。兼業農家だった実家の農業を継いでえのき栽培を始め、現在は専業。市が実施する「大山えのきファーマーズスクール」の就農コーチも務める。

もっとやんちゃになってもいい



### えのき農家 日田市大山町 三笈 靖彦 〈60〉

父は梅などの果樹類を作りながら、役場で農業での町おこし「NPC運動」を進めていました。運動の最終的な目標は人づくり。普通は他人に教えない農家の技術を互いに教え合い、みんなが豊かになるため一緒に盛り上がっていくのが大山です。父からもそんな教えをもらいましたね。えのきを作り始めて30年以上。15年目くらいから栽培方法を独自に学んで編み出してきました。今までの集大成として6年前に工場を大型化しましたが、まだまだ足りない。今はもっと環境に優しい栽培方法を考えています。大切なのは何事にも興味を持ち、トライして経験すること。継続していけば、途中でやめなければ失敗じゃない。若者はずっとやんちゃになってもいいんじゃないかと思えます。もともと自分の殻を破って、世界に出て行くべきです。

YOSHIKAZU OUCHI

1962年生まれ。日田林工高卒業後、父が1974年に創業した「大内工芸」に入り、竹工芸の道に進む。着が生産の約9割を占めるほか、フォークやしゃもじも製作。2006年には同社の代表取締役役に就任した。

地道に長く  
続ける大切さ



### 竹細工職人 日田市天神町 大内 良和 〈56〉

幼いころから祖母や父の仕事を見てきて、竹工芸の仕事に慣れ親しんでいましたので、家業を継ぐことに抵抗はなかったですね。父は私が中学1年のときに独立。1995年には「酒器セット」が国際デザインフェアで金賞を受賞し、今でも会社の大きな誇りになっています。会社では現在、主力の箸のほか、フォークやしゃもじなども手掛けていますが、同じものを長く作り続けていくことは、技術の向上にもつながる大切なことだと思っています。私は、一度使ったお客さんに「また同じものを使いたい」と言ってもらえるような製品作りを目指しています。若い人たちも、これと決めた仕事を地道に続けていけば、きつと先が、将来が見えてくるのではないのでしょうか。

AZUSA KAWAZU

1987年生まれ。福岡県内の高校を卒業後、大阪府の体育大学へ進学。創作ダンスなどに打ち込んだ。母親が開いていたキッズダンス教室を継ぐために22歳で帰郷。教室でダンスやヨガを教えながら、九州を中心に各地でダンスの舞台公演にも出演、日田市内の高校の授業でダンスを教える。

今しかできないことを  
やり抜いて



### ヨガ・キッズダンスインストラクター 日田市田島 川津 一紗 〈31〉

母の影響もあり小学生のころからエアロビクスやクラシックバレエなどを始めました。体と心を開放して、自分を思いきり表現できるダンスは大好きです。だから今の仕事は天職だと感じています。ヨガやダンスを教えるのが中心になっているけど、自分のスキルアップと知識を深めるために年に1回くらいはアメリカ・ニューヨークにダンス留学しています。得たものを日田に還元したいし、世界で活躍できるダンサーになりたいという夢もあります。日田はいい温泉があるので体のメンテナンスのためによく行きます。中高生の皆さんには、今しかできないことを思いっきりやり抜いてほしいと思います。これからの日田は、いろいろな地域や国の人を受け入れる間口の広い、刺激的なまちになってほしいですね。

TOMOMI NAKAMA

1974年生まれ。藤蔭高から広島県の大学へ進学し、電気工学科で学ぶ。22歳で日田へ戻り、祖父の代から続く実家の梨農家「芳香園」を継ぐ。6品種をメインに栽培する梨は横浜や神戸、長崎などに出荷。梨の酢やドライフルーツなど加工品の開発にも取り組む。

失敗から学べる  
人間になって



### 梨農家 日田市夜明中町 中間 朋海 〈43〉

家業を継ぐのだからという思いは子どもころからありました。梨栽培は、自分で工夫をしようと思えばいろいろな試せます。結果は出たり出なかったり。日照りや長雨など気象の変化が激しいので、ストレスをいかに和らげてあげるかは常に考えています。10年ほど前から加工も始めました。基本的にもづくりが好きなので、どんな商品を作ろう、どうすればおいしくなるか…と考えるのも楽しみです。日田は自然が豊かで環境が良い反面、狭くてライバルと競い合う感じが無い。のんびりなのもいけど、日田以外の人との関係や交流を持つて、もう少し視線を外に向けては。大切なのは目標を作ること、観察して考えること、チャレンジすることです。失敗しても次に生かせるよう、そこから学んで行動できる人間になってほしいですね。

ため息は、  
つくものではなく、  
漏れるものだと思った。

HITA  
PRIDE  
PROJECT

KAZUKI ASAMI

1993年生まれ。数百年続く「景流寺」の次男として生まれる。日田高卒業後、福岡県の大学へ進学。寺の歴史を途絶えさせたくないと、独学で作法や規則などを学び、大学4年生になるころに住職を継いだ。

強い、温かいまち  
日田は地域のつながりが



住職  
日田市神来町  
浅海 和希 <24>

住職の仕事は、ひとの人生の最期に寄り添う仕事です。葬儀や法事をいいものにし、悲しみの中にいる遺族を少しでも光の射す方向へ導けるように、前向きな気持ちになってもらえるようにと思って、法話をしています。やりがいというより責任を感じながら仕事をしています。寺は地域とともに何百年と続いてきました。だから、日田は地域のつながりの強い温かいまちだと思います。中高生の皆さん、親の言うことに耳を傾けるのは大切ですが、何かを決めるときには自分で決断してください。ひとから言われて決めれば自分自身が後悔します。過去や未来にとらわれず、今、現在に100%の力を注いでほしい。日田に若い人が増えて、一緒に未来を語れるような希望の多いまちになってほしいと思います。

SHIZUO NAGASHIMA

1955年生まれ。日田高から福島県の大学へ進学し、機械工学などを学ぶ。卒業後はエンジニアになり福岡県北九州市の企業に4年間勤務。日田市にUターン後は市内の鉄工所に就職し、10年ほどで独立。日田祇園祭の人形師だった父の後を継ぎ、祭り唯一の人形師として活躍する。

外に出て、心を育てて



人形師・エンジニア  
日田市隈二丁目  
長嶋 静雄 <62>

僕は学生時代から、祭り(日田祇園)の季節には必ず帰ってくる祇園男。山鉾が増えるにつれて人形作りの量も増えたため、日田に戻ってからは本格的に人形作りの手伝いを始めました。エンジニアとしては企業の機械整備などの仕事をしてきて、今でも二足のわらじで続けています。人形師としてのやりがいは、山鉾に人形が乗った途端に生きて、みんなが感動してくれるとき。そして完成した山鉾が動く瞬間と曳き手の笑顔が見られること。感動や達成感がこみ上げますね。若者に意識してほしいのは「長幼の序」。子どもは大人を敬い、大人は子どもを慈しむ。当たり前のことですが、祇園のしきたりの一つでもあります。あとは、やっぱり外に出らんとつまらんですよ。いろいろな学んで、心を育ててください。

YOICHI MATSUKAMI

1973年生まれ。藤蔭高を卒業後、日田市内の車部品メーカーに就職した後、38歳で家業の「松農園」を継ぎ、林間わさびやきゅうりをメインに、芽キャベツや世界一辛いとされるとうがらし「キャロライナリーパー」など珍しい野菜作りにも挑戦している。

自分の天井を決めるな



農業  
日田市上津江町  
松上 洋一 <44>

市内で20年近く会社員をやっていました。長男だしとこかで家業を継ぐという意識があり実家へ戻りました。農業はゼロからのスタート。先代が畑や山、農機具など始める条件をそろえてくれていたし、農業なら空いた時間に地域活動だつてできると思って「やってみようか!」と。近所の人にも助けてもらい、なんとか6年間いい方向で仕事ができています。ペテランの農家さんには野菜の音が聞こえるそうで、僕も「水がほしいよ」とか、うつつらとは聞こえるようになってきたと思う。成功よりも失敗から教えられることの方が多かった僕が伝えたいのは、自分の天井を決めないこと。失敗してもいいから、自分の殻を破っていくしかない。一生懸命やれば、勝っても負けても気持ちいいじゃないですか。

HIDEAKI ISAYAMA

1967年生まれ。日田林工高を卒業後、福岡県の大学に進学。1989年、東京の企業に就職、営業職として働く。2004年に帰郷。父の知人でもあった、焼きそばの「想夫恋」の社長から誘いを受け、同社に入社した。2007年から花月店を経営している。

帰ってきて、  
本当に良かった



飲食店経営  
日田市財津町  
諫山 英明 <50>

家業の家具製造業が廃業したとき、「仕事より家族だ。両親のそばにいてあげたい」と思い帰郷しました。その直後に想夫恋の社長から「頑張れば独立して店を持てる。トライしないか」と誘われ、日田らしい仕事だし、この仕事なら帰って働く意味もあるなと入社しました。3年間、日田や福岡県の店で修業して、2007年に社長に直訴して店を任せられました。もう10年が過ぎますが、焼きそばは簡単そうで奥が深い。まだまだ修業です。店を持ったころは姉が接客してくれたし、両親は今も掃除や材料の仕入れを手伝ってくれます。家族の支えがあつて、今がある。最近では家族の絆が深まったように感じていて、日田に戻ってきて本当に良かったなと思います。中高生の皆さんには、家族のことを第一に考えて過ごしてほしい。そして、孫やひ孫と多世代で、にぎやかに暮らす家庭が日田に増えたらいいな。

FUKIKO SUGAHARA

1971年、九重町生まれ。森高（現・玖珠美山高）卒業後、日田市内で働き、2004年、結婚を機に大山町に移住。2005年には、当時栽培していた梅などを使った加工品を作る「菅原農園フキ工房」を開設。現在は柚子こしょうやドレッシングなどを製造、県内外で販売している。

夢にチャレンジして



農産加工業  
日田市大山町  
**菅原 富貴子**  
〈47〉

実家が農家だったこともあり、違和感なく農業に溶け込みました。現在、夫はハーブや野菜を主に栽培。私が「フキ工房」で、自家製のトウガラシなどの農作物を活用した柚子こしょうやドレッシング、酢みそなどを製造し、県内外で販売しています。仕事のやりがいはお客さんから「おいしいから、また同じものを買いに来ました」と聞いたときですね。県主催の加工品コンクールで「ゆずつこドレッシング」が入賞したときも、「私たちの製品が認められたんだ」と大きな自信と励みになりました。私もまだ試行錯誤を続けていますが、若い人も夢をあきらめず、納得がいくまでチャレンジしてほしいと思いますね。



飲食店経営  
日田市夜明中町  
**判田 博文**  
明美  
〈59〉〈53〉

HIROFUMI HANDA  
AKEMI

博文さんは1964年生まれ。日田高卒。大阪府の大学を卒業後に帰郷し梨栽培に取り組んだ。現在は福岡県うきは市の嘱託職員も務める。明美さんは1959年生まれ、福岡市出身。同市内で証券会社に勤務。2人は2002年に結婚。4年後に明美さんも日田市に移住。2013年に夜明ダム湖畔にカフェ「AURORA（アウローラ）」をオープンした。

毎日の出会いがやりがい

カフェを開いたのは、家業の梨園で食べられるのに出荷できなくなつた梨を加工品にできないかと思つたのがきっかけでした。「AURORA」は夜明けを意味し、町の活性化にもつながればとの願いも込めています。カフェでは梨で作つたジュースやコンポートなどのほか、ランチも人気なんです。テラスから望む筑後川は美しく、高校のポート部の練習も見えるのでとても癒やされる風景。県内外から足を運んでくれたお客さんとの会話と「また来るね」の一言が、毎日のやりがいになっています。出ていって本当にすてきですね。日田は変わつてほしくないままです。働く場所が少ないので受け皿も必要でしょうが、自分で何かをしたいと思う人はぜひ帰ってきて、生き生きとした過ごし方を見つけてほしいですね。

KAZUYA ETO

1964年生まれ。自転車競技の名門、県立日出高時代にインターハイ準優勝や国体総合優勝などの実績を残す。日本競輪学校を卒業し、競輪選手として活躍。30歳で拠点を日田に移した。2000年に引退。青果卸や製菓の会社で働いた後、父の自転車修理店を継いだ。現店名は「サイクルショップEto」。

おらかな日田で、  
楽しく仕事ができる



自転車修理業  
日田市中ノ島町  
**江藤 和也**  
〈53〉

中学3年の夏、店にあったロードバイクを父が与えてくれて乗るようになりました。ある日、路上を走っていると後ろから競輪選手に抜かされて「ついてこい！」と言われました。必死について行って、その後、練習にも加えてもらえるようになりました。自転車に魅力を感じたのはそんな経験からです。日出高ではエリート選手ばかりの中で人一倍練習しました。競輪選手のように大事にしていたのは「手に届く目標を着実に達成していくこと」。中高生の皆さんも大きすぎる目標を追うのではなく、小さな目標を一つずつクリアしてほしいです。店では選手時代の名残で自転車の錆や汚れを落として、ピカピカにしてお客様に返すようにしています。喜ばれますよ。日田の人はおらかな人が多くて、楽しく仕事ができますね。



農業  
日田市天神町  
**塚田 寿**  
〈43〉

HISASHI TSUKADA

1974年生まれ。日田林工高を卒業後、東京都の建設会社へ就職。現場監督として関東一円のマンションやビルの建設現場を手掛ける。5年の勤務を経て日田へ戻り、西瓜や白菜を育てる実家の農業を継ぎ、3代目となる。「JAおおいた日田青年農業研究会」の会長も務めた。

夢や目標を明確に持つて

小さいころから、夏休みなどには収穫した野菜の運搬など家の手伝い。自然と「将来は農業をやるんだ」と思っていました。しかし、一度は外を見てみたいと思つて。ものづくりが好きだったこともあって、4、5年と期間を決めて建設会社で働きました。農業はゼロからのスタートで失敗もたくさんありましたが、分らないことは先輩に教えてもらうなど周りの人に助けられました。日田ブランドの農産物が多いのも先輩方や関係機関などの努力のたまもので、感謝の気持ちを持って僕も農業で恩返しをしたい。失敗も振り返ってみると勉強になったし、決して悪くなかった。皆さんも失敗しても諦めずに続けていくことで、成長につながるはず。大切なのは夢や目標を明確に持つことだと思います。

MINEYUKI KAWAZU

1973年生まれ。前津江中を卒業後、大分市の高校、茨城県の大学へ進学。卒業後は日田市へ戻って村役場に就職。村営キャンプ場勤務を経て祖父が手がけていた食品加工業を継ぎ、2004年に「川津食品」として法人化。柚子こしょう製造販売のほか、九州の食を世界に発信する取り組みにも力を入れる。

ド田舎でも  
ここまでできる



食品会社代表  
日田市前津江町  
**川津峰之**  
〈44〉

学生時代は剣道一筋。特待生で高校、大学へ行きました。バイヤーになりました。就職試験も通りましたが、長男だからという思いが心の底にあってUターン。当時テレビや雑誌で取り上げられ始めていた柚子こしょうのブームを予感して、世に普及させたいと現在の道を選びました。会社の立ち上げは30歳のとき。大手食品メーカーとの取引や新商品の開発、展示会やコンクールでの受賞も重ねました。ド田舎からのチャレンジですがここまでできるんです。これからも日田や九州の力、うまいものを世界に発信していきたい。やる気は場所を選びません。自分のやっていることにやる気と自信のある人は顔つきや声、雰囲気が出てきます。「良い田舎くささ」というパワーで決まる勝負もありますよ。

SO YUASA

1975年生まれ。日田高を卒業後に上京。東京都内の大学を卒業後は、弁護士を目指し司法試験に向けて勉強をしながら都内のIT企業に勤務。27歳で帰郷し、母親が経営する学習塾の手伝いを始めた。現在は「代ゼミサテライン予備校集英館トップゼミ」の館長を務める。

このまちの良さに  
気付いて



学習塾経営  
日田市田島一丁目  
**湯浅 総**  
〈42〉

弁護士を目指していましたが、地元の課題が気に掛かったり、母や祖母から早めに帰ってくるよう頼まれたりしたこともあってUターンしました。都会はつまらなくもなかつたけど、一生を懸けるような道は見つけられませんでした。塾では生徒全員が自分の子どものようなものです。卒業してからも成人式の晴れ着を見せに来てくれるし、人生相談もしてくれる。勉強に加えて、人間として生きる力や人の温かさを教える塾でありたいです。大人は「日田には何も無い」と子どもを外に出します。「こんないいまちなのになぜ気付かないのか」という感じ。勉強だけなら都会でもできるけど、人と人が寄り添う温かさは日田だからこそ教えられたいと思います。今の日田には何の不满もありません。ただ、全ての人がこのまちの良さに気付いてほしいですね。



YUSUKE ITO

1986年生まれ。日田高を卒業後、福岡市の公務員専門学校に進学。就職先が決まっていたが大病を患った父に「手伝ってほしい」と頼まれ、20歳で帰郷。父の死後、23歳から家族の中心になって西瓜と白菜の栽培を続けている。

失敗して、成長しよう



西瓜・白菜農家  
日田市神来町  
**伊藤 悠介**  
〈32〉

いろいろな経験をして、40歳くらいで農業を継ごうと思っていたんですが、突然、父が体調を崩した。「農業を手伝ってほしい」と尊敬する父に頼りにされたこともあって日田に戻る決意をしました。農家には理想とする作物の形や味があります。大きくて甘い西瓜、ばらつきのない形のそろった白菜を作りたい。そんな作物ができたときは達成感があるけど、まだまだ経験も技術も、動も足りません。勉強が必要です。日田は都会と比べてまちの変化がゆっくりしていて、懐かしい風景が残っている場所もできています。そういうところが好きですね。将来一度は息子と一緒に農業をやってみたい。息子にも中高生の皆さんにも伝えたいのはいろいろな世界を見て、たくさん失敗をしてほしいということ。失敗しないと、成長はないですから。

TAKAFUMI NAKANO

1981年生まれ、日田高卒。福岡県の大学へ進んだ後、横浜市でBMW製のバイクディーラーに整備士として就職。29歳でBMW製バイクやサイドカーを専門に修理、整備などを手掛ける家業の「中野モーターズ」を継ぐため帰郷。現在は社長。

たくさんの経験をして  
日田で発揮して



## 中野 貴文 <36>

バイク専門店経営 日田市田島一丁目

幼いころからBMWのバイクに囲まれて育ちました。1950〜1960年代ごろに製造された年代物のBMW製バイクを専門に扱う店は全国でも稀です。最近のバイクは全てがコンピューターで制御されていてどこが故障したかが簡単に分かりますが、年代物だとエンジンを掛けて音を聞くなどして故障箇所を見つけて修理する。経験や知識が物を言う仕事。面白いですよ。修理や整備の依頼は全国から来て、何十年も大切に乘っているお客さんの愛車を直して喜んでもらえることがやりがいです。中高生の皆さんには、一度日田を出ていろいろな経験をしてほしい。いろいろな考え方を学べるし人生観も変わると思います。その経験をいつか日田で発揮してほしい。若い人が増えて活気あるまちになってほしいですね。

MASANORI YUASA

1959年生まれ。玖珠農高(現・玖珠美山高)卒業後、県農業実践大学校(現・県立農業大学校)で2年間、梨栽培を学んで1978年、「湯浅農園」を開設。現在、梨、栗、苺の直売、観光農園の運営のほか、しいたけ栽培などにも取り組む。

意志と行動力で挑戦を



## 湯浅 正徳 <59>

梨・苺農家 日田市天瀬町

長男として、地元に残って家を守るといふ思いがありました。でも父が携わった林業や米作を引き継ぐのではなく、梨の栽培に取り組みました。当時、梨は収益がよく、何より自分が小さい頃、とても食べた果物だったから。繁忙期は夏から秋のため、12年ほど前からは冬から春中心の苺栽培も開始。さらに自分で作ったものには自分で価格を付けたいと直売を始め、苺狩りなどができる観光農園にも挑戦しました。口コミでお客さんが増え、観光農園で「おいしー」と言っていただけののが大きなやりがいになっていますね。農業は今、後継者不足で耕作放棄地も増えています。一方で空いた田畑を活用できるチャンスでもある。若い人には農業への挑戦も含め、夢を持ってどんどん行動してほしい。若いときは失敗しても取り返せません。やり遂げるという強い意志と行動力があれば何とかなるものですから。

HIDENORI WATANABE

1943年生まれ。中学を卒業後、農業経営者を養成する経営伝習農場で農業を学び、産業開発青年隊で建設関係の知識を身に付けると、19歳で大阪府の建設会社に就職。25歳で帰郷し、前津江村役場に勤務。定年退職後、農業に専念し山椒、柚子、わさびなどの栽培に精を出す。

ふるさとには逃げずに  
待っているよ



## 渡邊 英典 <75>

山椒農家 日田市前津江町

男らしい仕事に憧れて建設会社で働きましたが、農家の長男だったので帰郷しました。役場では前津江の振興作物として、山椒、柚子、わさびを普及させる仕事に携わりました。自分でも米に加え、この3種類の作物を作っています。「去年より今年、今年より来年」と、前年より良いものを作るよう努力することを信条にしています。天候に左右される農業はベテランでも日々勉強です。努力の末にいい作物ができるとうれしいです。若い人には「やらずに後悔するよりもやってみよう」と伝えたい。自分の決断なら何事も苦にならないと思いますよ。生まれ故郷で生活するのはいいものです。年齢を重ねると余計にそう感じます。若い人たちも一度は日田から出て、思いっきり頑張ってみてください。ふるさとには逃げずに待っていてくれますから。

RIE(ZUIKA) TAKEUCHI

1970年、埼玉県生まれ。中学から大学まで東京都内で過ごした。3歳から書道を学び、神奈川県私立小学校に書道教諭として6年間勤務。結婚を機に1999年、日田市へ。書家の活動のほか、「長福寺」の坊守(住職の妻)、「月隈こども園」の理事も務める。

経験と広い視野、挑戦心を



## 武内 理恵(瑞華) <47>

書家 日田市豆田町

3歳の時から始めた書道はライフワーク。書くことも楽しいんですが、書きたい方向性を探る、その試行錯誤の過程が好きなんです。寺やこども園の理事としての仕事のほか、園では子どもたちに文字指導も行っています。そんな中で作品づくりですが、大学の恩師から「書家を専業にしていけないからこそ風合い、作品力がある」と言われたときはうれしかったですね。2014年と2015年の日展(改組新日展)で入選したことも、実力が認められたんだと大きな自信につながりました。若い人には、さまざまな経験を積んでほしいと思います。生きる力になる経験は積んで、広い視野と挑戦する気持ちを持てば、自ずとやるべきこと、やりたいことが見つかると思いますよ。



心休まる場所は、  
昔からいつも身近にある。

HATA  
PRIDE  
PROJECT

TSUTOMU HONKAWA

1983年生まれ。日田林工高卒。福岡県の専門学校で経営について学んだ後、鹿児島県の製茶問屋で研修を受け、2004年に帰郷。2008年、先代の祖父の死をきっかけに「日田製茶園」社長に就任した。自社栽培の大麦若葉を使った商品など新製品の開発にも注力する。

## 日田の茶文化を広めたい



## 九州産茶問屋 本川 努 <35>

日田市刃連町

小学生のころから学校から帰ると、製茶工場の手伝いをしていました。いつも楽しみな時間でした。中学生のころには家を継ぐと決めていたと思います。今の時代はペットボトルの茶を飲むことが多くて、急須で注ぐ茶の味を知らない子どもが多い。日田に茶の文化があることを知ってほしいから、小学生の工場見学を受け入れたり、市内の保育園に茶を寄付したりしています。自分も参加している日田祇園祭に代表されるように、日田には歴史や伝統文化がよく残っているところが良いところだと感じます。福岡に住んでいた時期もあつたけど、日田の方が空気が合いますね。日田の茶を広く知ってもらえるようにPRしながら、まちの魅力も伝えていければいいですね。

HIDEKI HATA

1949年生まれ。三隈中卒業後に福岡県内の表具職人に弟子入り。7年間、修業を積んで23歳のときに「畑表具店」を開業。1982年の第1回一級技能士全国技能競技大会(技能グランプリ)に県代表として出場した。「ひた伝統技能マイスター」の一人にも選ばれている。

## 自分を貫く、そんな人に



## 表具職人 畑 秀樹 <68>

日田市玉川町

幼いころ、近所の表具職人さんが一つ一つ丁寧に古い掛け軸などを修復する姿を見て、「カッコいいなあ」と思ったのが今の仕事を目標にしたきっかけでした。子どもながらに「古いものを残していく大切さ」も感じたものでした。文化財など古いものを修復する仕事ですから失敗は許されず、ピンセットを使うような神経を使う作業も多いですね。咸宜園の門下生の書画など、後世に伝えなければならぬような大切なものが数多く残っている日田で、この仕事に携わっていただけることは大きな誇りです。若い人たちも、かつての職人たちのように、口ではなく手を動かし、自分のやりたいことを貫く、そんな人になってほしいですね。

MIHOKO GOTO

1984年生まれ。日田高を卒業後、美容師を目指し東京都の専門学校で学ぶ。18歳でネイリストへ転向し、都内の大手ネイルサロン店長などを経て日田へ帰郷。2008年、市内初のサロン「Nail Salon & School moco」をオープンした。

## 誰が何を言っても、決めるのは自分



## ネイリスト 後藤 三保子 <33>

日田市隈一丁目

美容師を目指していましたが、ぬれた状態での作業に耐えきれず爪が全て剥がれてしまつて。専門学校を辞めて進路を考え、その学校で学んでいたネイルと在学中に資格を取っていた介護で迷った末にネイリストの道へ。世界的なコンテストで優勝するような先生たちと一緒にサロンで働き、追い掛けて国内外のコンペや商談などにも参加しました。ネイリストの土台になる技術は奥が深く、極めたいと誰しもが追求していくもの。その向上心を分かってくれるお客様がいて、褒めてもらえると「頑張りますー」と思います。若者に伝えたいのは挑戦することの大切さ。興味のあることには当たつて碎ける覚悟で挑んでください。誰が何を言っても決めるのは自分。後から後悔するなら、自分で決めて後悔する方がいいはずですよ。

MASANORI KUBO

1976年生まれ。日田高卒。大分県立農業大学校を卒業後、農業経営などを学ぶため渡米。リンゴ農園などで働いた後、23歳でえのき農家を継ぐために帰郷した。

## 人とのつながりを大切にしたい



## えのき農家 窪 真範 <41>

日田市大山町

幼いころから農作業を手伝っていたこともあって大分県立農業大学校に進学しました。20歳になるころに、自分が何不自由なく成長できたのは代々受け継がれてきた農業のおかげだと考えるようになって跡を継ぐ決意をしました。現在は主にえのき茸を育てながら、季節ごとに色々な作物を育てています。作物はどれたけ手がかけたかで、出来も変わってくるし、それが売り上げを左右します。いいものを作るために試行錯誤しながら挑戦できるのがやりがいです。日田に戻ったころ、「一番感じたのは人の良さ」と空気がおいしさでした。中高生の皆さんには、そんな自分のふるさとを忘れなくてほしい。私が住む大山は人とのつながりを大切にしてきたから発展できた土地だと思っています。これからもそれを大切に守っていきたいですね。

黄金に  
勝るとも劣らない  
彩りがある。

HITA  
PRIDE  
PROJECT

KOJI NAKASHIMA

1968年生まれ。日田高卒。米国での農業研修などを経て25歳の頃に帰郷し、家業の農業を手伝う。2005年、「中島農場」を設立し代表取締役就任。現在は米やしいたけを中心に生産・販売。高齢化した農家などからの依頼を受けた米の受託生産も行っている。

ありがたい、を  
やりがいに



## 農業会社経営 中島 浩司 <49>

日田市三ノ宮町

農業を継いだのは、小さい頃から父に「家業は継ぐものだ」と言われ続けていたせいでしょう。代々、米作と牛の肥育が主でしたが、現在は牛はやめ、米としいたけを中心に栽培。高齢化などで作業が困難になった農家の委託を受けた米作りも行っています。販売先は市内外の病院や施設などで直売が主。減農薬栽培の米なども作っており「顔が見える、安心・安全の米が売り。お客さんが満足して「ありがたい」と言っていたら、たときが一番うれしいですね。日田は仕事が少ないと言われますが、日田にいないだけでは学べないこともたくさんあります。若い人には一度、外に出てさまざまな経験、知識を身に付けた上で、また戻ってきてほしい。今はメディアも発達し、全国どこにでも日田から情報発信できますから。そうすれば日田も盛り上がると思いますね。



## ぶどう農家 大藏 高明 <52>

日田市清岸寺町

家具をデザインする仕事とぶどう農家の仕事は、セロからもを作りあげるという点で共通する部分があります。ただ農業は自然相手で不確定要素も多い。そんな中で試行錯誤しながら、いいぶどうを作ってお客さんに喜んでもらうのはうれしいし、やりがいを感じます。農家は土を踏みしめながら働く仕事。四季の変化を肌で感じられ、ぶどう園に聞こえてくる鳥の声にも癒やされます。生きている感じがしますよ。中高生の皆さんには一度、日田を出ることをお勧めします。ほかの地域に行ってみないと、自分にどこの環境が合っているのか分からないし、日田の本当の良さにも気づかないと思うから。日田はこれからも田舎の良さが残る、人に優しいまちであり続けてほしいです。

これからも人に  
優しい日田であって

TAKA AKI OKURA

1965年生まれ。日田林工高卒。福岡県の専門学校でデザインを学んだ後、日田市内の家具メーカーでデザインの仕事に携わる。1997年に家業のぶどう農家を継ぐため就農。現在はブラックオリーブなど15種類のぶどうを栽培する。「ぶどう園OKURA」代表。

MASAHIRO TAKEUCHI

1982年生まれ。日田高を卒業後に米国の大学へ進学、語学や経営学を約4年間学ぶ。帰郷後、豆田町でレストランやウエディング事業も擁する家業の「ホテル風早」に勤務。現在は専務取締役。

自分がやりたいことを  
突き詰めて



## ホテル経営 武内 真央 <36>

日田市豆田町

洋画や洋楽が好きだったので、英語を学びたくてアメリカの大学へ進みました。長男だからいずれは帰るつもりもあつたけど、父は家業を「継いでも継がなくてもいい」という姿勢。向こうで働くこともできましたが、母の病気が分かり、23歳のときに帰りました。日田は水と緑と温かい人に囲まれて、生きるうえで窮屈じゃない場所。帰ってきてよかったと思います。仕事は接客や当直、掃除や料理の提案など何でも。大切なのはお客様の要望ももちろんですが、自分が自信を持って提供できるものを追求すること。そうすれば、人がおのずと集まって来ます。若者に伝えたいことも同じ。「自分が何が好きで何がしたいか」を突き詰めて、その延長線上にある職業を選ぶのがいい。最終的には、興味を突き詰めた人たちの勝ちですよ。



## 小鹿田焼陶工 坂本 拓磨 <23>

日田市源栄町

TAKUMA SAKAMOTO

1994年、小鹿田焼窯元の長男として生まれる。日田林工高を卒業後、陶工の道へ。3年目には陶磁器、織物、染物、木漆工などを集めた平成27年度日本民藝館展で、作品が日本民藝協会賞を受賞。「スタンダードな作りの中に柔らかさがある」と評された。

いつまでも  
変わらない日田で

周りの友達が進路を決めるころ、自然と陶工を継ぐ道を選びました。幼いころから作業場で陶土をいじって怪獣などを作ってた遊んでいて、造形美術にも興味があつたので抵抗はありませんでした。陶工の仕事は良ければ売れるし、悪ければ売れない。分かりやすくやりがいがあります。どんな料理が盛られるだろうと想像しながら作ってイメージ通りに焼き上がり、買った人に喜んでもらえるとうれしい。中高生の皆さんには自分がやりたいと思ったら、悩むよりもまず挑戦してほしい。「やりたいことがある」のは良いことです。日田の人は「小鹿田焼の里」を知ってはいても、実際足を運ぶ人は少ないように思うので、市内の人にも魅力を知ってほしいです。生まれ育つた日田。いつまでも変わらずあり続けてほしいですね。

時が流れても、  
花は変わらず  
美しく咲く。

HITA  
PRIDE  
PROJECT

SHINSAKU HANDA

1985年生まれ。日田林工高卒。福岡市で建設業やホテルマンとして約10年間働く。父が病気になったのを機に、2013年、家業の梨栽培を継ぐために帰郷した。幸水や豊水、あきづきなど露地栽培で8品種の梨を育てる。

大切なのは  
人との関わり



梨農家  
日田市夜明中町  
判田 晋作 <32>

もともと家業は継ぐつもりでいました。しかし、一度は一人暮らしがしたくて、高校卒業後しばらくは福岡で働いていました。そのときに学んだのは人との関わりの大切さ。貴重な経験になりましたね。梨は自分が手を掛ければ掛けるほどいいものができます。周囲の人に支えられながら収穫できたそんな梨を「おいしい」と食べていただいたときは本当にうれしいものです。農業の醍醐味ですね。4月中旬からは交配作業が始まり、幸水、豊水などの出荷が重なる8月下旬にかけてだんだん忙しくなります。梨を栽培する仲間たちは今のところ若い世代が多いですが、将来は後継者不足も心配。若い人たちが日田に戻ってきて、農業を継ぎ、まち全体を盛り上げてほしいと願っています。

SAKAE TESHIMA

1949年生まれ。戸山中卒業後、近くの大工に弟子入りし、19歳の時に独立。2016年には「ひた伝統技能マイスター」に認定された。現在、日田市豆田町の国重要文化財「草野本家」で進む大規模な保存工事にも携わっている。

自分の手で  
家が  
できる喜び



大工  
日田市三河町  
手嶋 榮 <69>

大工の弟子入りを決めたのは親の勧めでした。当時は集団就職の時代。進学よりも手に職を付けた方がいいとの思いです。弟子入り当時、身長は140センチほどと小さく、師匠も「すぐ辞めると言いたさだろう」と思っていたそうです。確かに力もなかったのですが、重いものを持つ仕事は大変でしたが、もの作りが好きで、先輩職人もいろいろ教えてくれたので辞めたいと思つたことはなかったです。自分の手で家が徐々に出来上がっていくのがうれしくて、当時手掛けた家やその家族との交流は今も忘れられませんが。私は若いとき、仕事だけでなく地域の青年団活動にも力を入れ、仲間の大切さを学びました。若い人たちには、自分の将来の姿を見据えながらも仕事一辺倒でなく、地域活動に、遊びに、一生懸命頑張してほしいですね。



MASUMITSU ZAITSU

1965年生まれ。日田高卒。重労働といわれる作業の効率化を進める一方、高品質のしいたけ作りにも力を入れ、これまでに「全国乾椎茸品評会」で5回、林野庁長官賞を受賞している。

農業でチャンスつかんで



乾しいたけ農家  
日田市月出町  
財津 満寿光 <52>

教員を目指して山口県の大学に進学しましたが、父が亡くなって、急ぎよ、しいたけ栽培を受け継ぐことになりました。ですから仕事を覚えるだけでも一苦労。親戚や同業者の先輩たちに支えられながら夢中でやりました。しいたけ栽培は正直、重労働。特に3、4月は昼食の時間も惜しんで早朝から夜まで作業場に閉じこもることもありま。それだけに満足がいくもの。できたときの喜びはひとしお。頑張ったら頑張った分だけ返ってくる、それがしいたけ栽培の魅力ですね。若い人から「日田市は仕事が少ない」とよく聞きます。でも農業、特にしいたけ栽培は生産者が高齢化し、需要はあるのになり手が少ない状況。やる気さえあれば大いにチャンスが広がります。ぜひ若い人にはチャレンジしてほしいと思いますね。

# 原田京子

<56>

食べることは  
生きること



KYOKO HARADA

1962年生まれ。日田林工高卒。大阪市内の建築事務所で働き、建築士の資格を取得したが、都会になじめず帰郷。約10年前から料理研究家として活動する。食育、料理教室のほか、商品開発のアドバイザーなども務める。

「食べることは生きること」。それを伝え続けることが使命だと感じている。

高校卒業後、大阪市の建築事務所で働いていた。心休まる暇もなく、せかされるように過ぎる都会の生活に疲れ日田に戻ったのが22歳。結婚して夫の実家の農業を手伝いながら、3人の子どもに恵まれた。次男は夏も冬も関係なく熱を出しやすい子で、40度の高熱に苦しむことも多かった。病院に連れて行っても原因は分からない。5歳になったとき、福岡県の病院で免疫学が専門の医師に診せると、細菌やウイルスなどの病原体に対する抗体が体内にできにくく、死亡例もある病気と診断された。不安になった。

「治るかどうかを悩んでも仕方ない。自分にできること

をして全力で支えよう」。それが料理だった。無農薬野菜を中心に、安心して安全な食事を心がけた。免疫力が付き体が強くなる料理を勉強。子どもが飽きないようにと「煮る」「焼く」「蒸す」だけではない調理法でレパートリーも増やした。料理と治療のかけがあつて次男の病状は大幅に改善。この経験から「食」の大切さを、ものすごく感じた」。次男は今、スイスの大学で免疫学が専門の研究医として働いている。

福祉施設で介護食を作る仕事をを経て、40代でレストランのシェフになった。今度は見て楽しく食べて感動する食事を提供した。自分の作った料理で人が喜ぶ姿を見ると、料理の無限の可能性を感じた。「料理の素晴らしさ、食事の大切さを広めよう」。約10年前料理研究家と

して主婦や親子向けに料理教室や食育活動を始めた。市内の高校では講師として調理師を目指す生徒たちを教える。行政や企業、まちおこしグループなどに請われ、商品開発のアドバイザーも務める。

自然に囲まれた日田には良質な農作物や果物などの食材、料理を引き立ててくれる小鹿田焼がある。そして、おいしい水。いつか日田の風土や景色、生きる人々の息づかい、食材を作る人たちの思いを詰め込んだ、日田の良さが感じられる料理を「創りたい」と思う。

「そんな魅力的な料理があれば、日田を離れた人たちも懐かしんで正月やお盆くらいは帰って来たくありませんよ」。今できることを続け、一歩ずつ進んでいけば、必ず実現できると信じて。

日田に生きる人たちがいる。  
一人ひとりのストーリーが  
紡がれている。

そして日田は、  
日田を愛する人たちで  
つながっていく。

HITA  
PRIDE  
PROJECT

# HITA PRIDE PROJECT

日田にはこんなにも日田を  愛する人たちがいるということを知ってほしい。  
日田にはこんなにも素晴らしい  ものがあるということを知ってほしい。  
都会へ進学しても、就職しても、  
日田で生まれ育ったということに誇りを持ってほしい。  
そんな願いから生まれたプロジェクトです。



日田市役所  
公式 Facebook



日田市  
プロモーションサイト



日田市役所  
公式 YouTube

遠くにいても、いつもそばにいるよ。  
いつでもふるさとを思い出して。



## 「日田(ヒタ/ヒト)」 HITA PRIDE PROJECT VOL.3

平成30年4月1日 発行

発行 日田市企画振興部 ひた暮らし推進室  
〒877-8601 大分県日田市田島二丁目6-1  
TEL 0973-22-8383 FAX 0973-22-8324  
編集・制作 西日本新聞社 大分総局 株式会社 西広  
印刷 株式会社エポックアート